

国指定重要文化財(昭47.5.15)

上江洲家 住宅



77千の防風林に
囲まれて
いるんだ。



建てられたころの国王・
尚敬王から戴いたと伝わ
る「世済其美」と書かれた
扁額も伝えられているよ。
伝統的な沖縄の住宅の間
取りなんだよ。



建築年代がわかる最古の住宅



主屋

上江洲家は旧具志川城主の子孫
です。代々間切の地頭代(ジトゥデー)
を勤めた旧家で、親雲上と呼ばれま
した。

敷地周囲はフクギが茂り、立派な
石垣で囲まれているため「石垣殿内」
とも呼ばれています。南向きの主屋
(ウフヤ)は敷地の中央に、前の屋は
西南に、殿内グウと呼ばれる蔵は東
に、便所は西にあります。敷地内には
ヒンプン、井戸(カー)、石垣などが残
り、屋敷全体がよく保存されています。

もともと主屋(ウフヤ)と台所(ト
ングウ)は隣接して建ってしまっ
たが、台所(トングウ)の改築の際に主
屋(ウフヤ)とつなげられました。台
所(トングウ)は1903(明治36)年
に首里にあった住宅の古材を利用
して再建しました。主屋(ウフヤ)は
茅葺き屋根でしたが、1891(明治
24)年に瓦葺きに改められました。
1993~1994(平成5~6)年に修
理を行っています。

主屋(ウフヤ)の建築年代が
1754(乾隆19)年であることが、上
江洲家が所蔵する文書で分かりま
した。沖縄で建築年代が分かる最
古の民家です。





中門



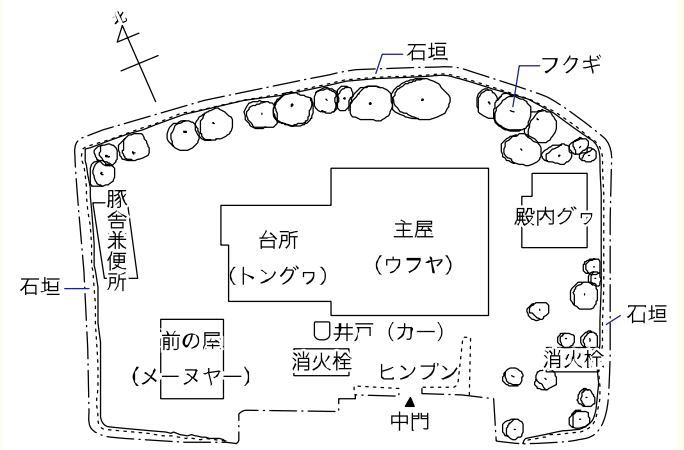
主屋



豚舎兼便所



前の屋(左)と主屋(右)



26°21'16.3"N 126°48'27.7"E



県指定有形文化財(昭31.2.22)

末吉宮礎道

今でもきちんと
石畳の道が
残っているんだね。



祭場の広場までは8段の階段、21段の階段、さらに7段の階段があって、のぼりつめたところには拝殿が建てられていたよ。周りの低い石垣を含めて21段の階段が「末吉宮礎道」と呼ばれている。沖縄戦によって破損したが、本殿を再建する1年前の1971年に「末吉宮礎道」は修復されたんだよ。



琉球八社のひとつ、末吉宮境内にある石段



末吉宮本殿



末吉宮礎道

末吉宮礎道は、首里城の北、末吉宮の境内にある参道から本殿までの石段です。

末吉宮はかつての琉球八社の一つで、「琉球神道記」(1648年)などの史料によると尚泰久王代の1456(景泰7)年頃、天界寺の鶴翁和尚が熊野三社権現を迎えて祀ったのが始まりと伝えられています。本殿・拝殿・祭場からなり、本殿は小高い丘の上であり、その下に祭場があります。本殿と祭場はそれぞれ別の岩盤の上であり、これらの間は小さい谷となっています。その谷合いに石垣を築き、石造のアーチ橋を架けており、かつては、その上に拝殿があったといわれています。なお、現在の本殿は1972(昭和47)年に再建されたものです。



26°13'48.1"N 127°42'51.0"E

つぼ や あら やき
壺屋の荒焼
 がま
のぼり窯



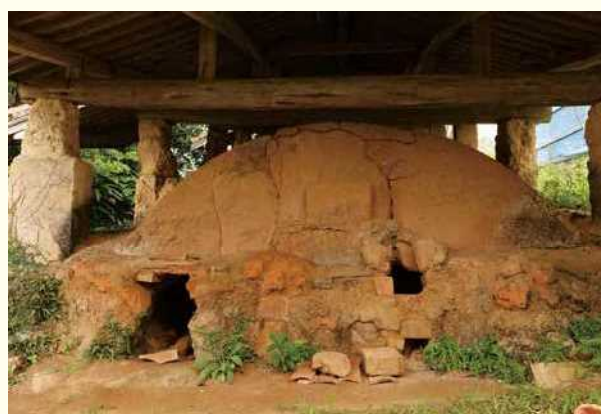
壺屋のヤブムン通りから見
 えるね。近くまで行ってもし
 いのかな？



もちろん、近くまで行くことができる
 よ。たき口が下の方にあって、内部
 は仕切りがなくてトンネル状になっ
 ているのを見ることができるんだ。
 周りにはこの窯を保護するための石
 積みを確認する、とができるんだ。



傾斜地に造られたかまぼこ状ののぼり窯



壺屋の荒焼のぼり窯

美里の知花、首里の宝口及び那覇の湧田の三ヶ所にあった窯が、1682(康熙21)年に王府の窯業統合策により那覇の牧志で合併され、この地を壺屋と呼ぶようになりました。この窯の建造もその頃とみなされており、壺屋に現存する唯一の荒焼窯で、フェーヌカマ(南の窯)ともいわれています。粘土で造られた長さ約20m、幅約3mのカマボコ型の窯で、傾斜地に建てられています。内部は屋根を支える柱のみで、トンネル状になっています。窯は赤瓦の屋根で覆われ、屋根を支える柱は琉球石灰岩の石柱や数個の石を積み上げて出来ており、焼ける心配はありません。この窯で造られるのは荒焼(素焼き)の陶器で、主に酒の容器、水瓶、厨子甕などです。



26°12'48.0"N 127°41'27.2"E

ヒジ川橋及び 取付道路



金城ダムの上流に架けられているんだね。道路の下側にあるけど、とても静かな場所だね。



近くにある「ヒジガ-」という川泉にちなんでつけられた名前なんだ。取付道路は橋の東側28m、西側の18.5mが指定されているんだ。琉球石灰岩を材料として中央の部分がわずかに高くなっている三段の階段状の橋なんだ。橋の脚の部分は布積み、その他は相方積みで造られているよ。



御茶屋御殿から、識名園にいたる途中の 金城川に架けられたアーチ橋



取付道路



橋まで延びる取付道路

首里から識名園へ行く途中にある金城川に架けられた石橋とその取付道路は、識名園が造られた1800(嘉慶5)年頃に建造されました。

橋は中央上部がわずかに高く、長さ13.18m、幅5.2mで琉球石灰岩を積んでアーチ構造を作っています。勾欄は板状の切石を据えただけのシンプルなデザインで、川床に張石を施している点特徴です。

取付道路は、首里を起点に南へのびる首里王府時代の石畳道の一部です。幅は約2.6mで石灰岩の小石を敷きつめています。緩やかな曲線を描きながら勾配を調節し、橋に対して斜め方向からつながるため、取り付け部分の長さは5.2m程あります。



アーチ橋



26°12'35.9"N 127°43'09.5"E



円覚寺から弁財天堂や天女橋を通る道は観光客だけでなく、近くに住む人たちにとっても良い散歩コースになっているね。

勾欄は修復されていないのが残念だけど鎌倉芳太郎の『沖縄文化の遺産』に掲載されているし、沖縄県立博物館・美術館に保管されているので、ぜひ見てほしいね。琉球の彫刻技術の高さがわかるよ。



りゅう えん きょう
龍淵橋



琉球の石造建築と彫刻の技術を示す橋



アーチ橋



龍淵橋



橋の床面

龍淵橋は、弁財天堂の円鑑池と龍潭の間の水路上に架けられたアーチ橋です。

建造は1502(弘治15)年で、天女橋と同じ年と推定されています。この橋の最も優れている点は、勾欄の羽目板の獅子、龍、麒麟、花、鶴、亀、鳳凰、牡丹などの彫刻で、技法は円覚寺放生橋と似ています。沖縄の石橋彫刻を代表するものですが、沖縄戦で被害を受け、現在はその一部が沖縄県立博物館・美術館に保管されています。

現在見ることができる橋は、1950(昭和25)年に修復されたものです。



勾欄羽目板の彫刻(鶴)



(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館) 26°13'07.0"N 127°43'05.8"E

県指定有形文化財(昭47.5.12)

旧首里城 守礼門

観光客が絶対に行く場所だよ。テレビでもよく紹介されているね。



西側には「中山門」という第一坊門があったんだ。この門は戦前に解体されてしまったけど「下の綾門」「下の烏居」と呼ばれていたんだ。装飾建築は中国の流れを汲んでいるけど、建築様式は日本建築、屋根は琉球独自の赤瓦屋根で、中国・日本・琉球の技を組み合わせて建造物なんだ。



二千年札の表を飾った沖縄を代表する建造物



旧首里城守礼門



扁額「守禮之邦」

守礼門は、かつての首里城の第二の坊門で、尚清王代(在位:1527~1555年)に創建され、「待賢門」または「首里門」とも呼ばれました。

尚永王代(在位:1573~1588年)に「守禮之邦」の四字額(扁額)が作られ、冊封使来琉の時

のみ、門に掲げていましたが、尚質王代(在位:1648~1668年)後期頃から常に掲げるようになりました。中国の牌楼(やぐらのある門)の流れをくむ装飾建築で、三間入母屋造重層の構造を持ち、屋根は琉球赤瓦で葺かれています。



26°13'05.3"N 127°43'00.8"E

県指定有形文化財(昭47.5.12)

旧円覚寺 総門

那覇市



かつては仁下像がいたんだね。見たかったな。この門を開けると大きな寺を見ることができたんだね。

鎌倉芳太郎の『沖縄文化の遺宝』に在りし日の円覚寺が掲載されているよ。とても立派な寺だったことがわかるよ。琉球建築を代表する建造物のひとつだよ。



琉球政府時代に復元された重厚な造りの門



旧円覚寺総門



円覚寺は、1495(弘治8)年、父尚円王の霊を祀るために尚真王が建立した、第二尚氏王統歴代の菩提寺で、琉球における禅宗(臨済宗)の総本山でもありました。伽藍配置は、鎌倉の円覚寺を模して禅宗七堂伽藍の形式を備えていました。

総門は旧円覚寺の第一門で、正面石牆の中央にあります。入母屋造本瓦葺きの八脚門で、中央に両開棧唐戸を設け、正面部分は吹き抜け、その奥左右に仁王像を安置していました。

建築様式は、禅宗式詰組・二手先出組で、垂木は一重で太く、軒周りは中国式、屋根の造りは日本式です。沖縄戦で破壊されましたが、1968(昭和43)年に復元されました。



26°13'06.4"N 127°43'09.2"E



ま ぶ に け はか

摩文仁家の墓



国王から拝領した
だけあって
大きくて立派な
お墓だね。



内部は天井が平らになって
いて(普通はアーチ式)、柱
や桁があるので住宅風な
んだ。入口が広くて下塚に
似ているのも特徴なんだ。



周りの壁を切石で積み上げた亀甲型屋根の墓



摩文仁家の墓(正面)



ま ぶ に け はか しろうじつ ま ぶ に け はか
 摩文仁家の墓は、尚質王の次男・摩文仁家の
 始祖尚弘毅(大里朝亮:1647~1686年)の墓
 で、別名宮城墓ともいわれています。尚弘毅は尚
 貞王代に11年間摂政を勤め、その功績により、
 この墓を拝領しました。墓は山の中腹の砂岩層
 を掘削して造られ、壁は琉球石灰岩の切石積み
 です。屋根は細粒砂岩で出来た平葺き型の天井
 板に土を盛った亀甲型で、漆喰で仕上げてあり
 ます。墓室内に石柱を立て石梁を渡し天井を支
 えています。この墓は内部が住居のような造りを
 しているのが特徴です。



26°12'28.2"N 127°44'13.8"E





本当だ。
上のほうがドームに
なっている。
初めて見た!



大城按司が攻められて亡く
なった時、部下の人たちが
近くにあった小石を拾い集
めて積み上げてドーム状に
なったとの言い伝えが残っ
ているよ。

うぶ ぐすく あん じ はか
大城按司の墓



上部がドーム状になっている珍しい形式の墓



大城按司の墓(正面)



ドーム状の上部



大城按司は名を真武まぶといい、麻姓の始祖にあたり、大城グスクの城主であったといわれています。大城按司の亡骸は、小石を円く積み上げた塚に葬られました。その塚が現在の墓の原形とされていますが、数回改築され、1892(明治25)年に現在地に移築されました。

上部はドーム状の石積みとなっており、その形から俗にボウトウ御墓とも呼ばれています。沖縄の墓の形式は、一般に亀甲墓、破風墓、平葺き墓、堀込墓、ミャーカ墓(巨石墓)等に分けられますが、この墓はそのいずれにも属しません。沖縄の一般の墓とは異なる独特の形式を持つ墓です。



26°10'05.5"N 127°45'52.1"E

ち ねん じょう あと
知念城跡



グスクから見下ると
太平洋がきれいだね。
風が心地いいわー



『おもろさうし』に「ちねん
んもりぐすく、かみおれは
るめのぐすく」とうたわれ
ている古いグスクなんだ。



11～12世紀頃に築城されたと考えられるグスク



知念城跡は、東西に連なる古城と新城からなる、連郭式の城です。古城部分は東側の台地に高さ1.5m～2mの野面積みの石垣をめぐらしています。その西側につながる新城の石垣は、切石による相方積みで2つのアーチ門があります。

古い時代の城で、城内には「友利御嶽」があり、琉球国王や聞得大君の東御廻りの拝所の1つであったと伝えられています。かつて城内には、瓦葺きの社殿(火の神)がありました。また、1903年(明治36)まで知念間切の番所が置かれていました。



26°12'28.2"N 127°44'13.8"E



建てられた時は
立派で荘厳なお堂
だったんだろうね。

久米島町仲里真謝にあるお堂で、
正面に向かって左側に「琉球国新
建始米山天后宮碑記」が建ってる
けど、これは救助された冊封副使
の周煌が書いたものなんだ。琉球
建築の特徴である両端が四方に
巡らされているのも珍しいよ。



てん こう ぐう
天后宮



1756年の冊封使遭難事件にゆかりのお堂



天后宮



天后宮は、別名菩薩堂とも呼ばれています。
1756(乾隆21)年に冊封使全魁らの船団が、尚
穆王の冊封のため沖縄島へ向かう途中台風に遭
い、真謝港沖で遭難しました。しかし一行全員
200名余りが久米島の島民に救助され、無事に
冊封の儀式を行うことが出来ました。それを神の
助けによるものと感謝した全魁が、尚穆王を通じ
て1759(乾隆24)年に天后宮を建立させました。
堂内正面に仏壇を設け、中国から持って来た天
妃像を本尊として祀り、左右に千里眼と順風耳の
二神将を配してあったといわれています。この
建物の様式は平入重層入母屋造りの本瓦葺き
です。



26°21'12.5"N 126°48'25.9"E